

なぜなら上に置かれた勝利の女神と4頭立ての馬車を正面から見る事ができるからである。
しかし、30年前のベルリンでは、東側へ簡単に入る事はできず、西側からほとんどその姿を見ることができなかった。その前に無粋な壁が無遠慮に続いていて、視界を遮っていたのである。



ブランデンブルク門の上に置かれた勝利の女神と4頭立ての馬車

並走していた先頭集団から最終段階で抜け出した中国の白雪を尾崎好美が必死に追うのをテレビで応援した人も多いだろう。その地点がまさに「菩提樹の下」大通りであり、ブランデンブルク門をくぐったところでレースは終わった。

ブランデンブルク門は、ガイドブックによると、一八世紀後半、プロイセン王国の凱旋門として、アテネ神殿の門を手本に建てられたという。この門は、何といても東側から眺めるに限る。

一九八九年の二つの事件
一九八九年は二つの世界的な事件で人々の記憶に刻まれているに違いない。胡耀邦の死をきっかけに、民主化を求めて天安門広場に集結していた学生たちを中心とするデモ隊を、六月四日、人民解放軍が無慈悲に蹴散らした天安門事件がその一つであり、もう一つは、十一月九日のベルリンの壁崩壊である。



観光名所「博物館の島」にあるベルリン大聖堂



東から眺めたブランデンブルク門

ベルリンを訪れるのは私にとって二度目、30年ぶりだった。

街の中心を東から西へ貫く「菩提樹の下」(Unter den Linden)大通りには、中央の歩道の両側と、その外側にある車道横の2本を入れて、計4本の菩提樹の並木が続いている。

名前のとおり美しい大通りである。通りの両側のカフェ、レストラン、土産物店やホテルは、観光客であふれていた。彼らの表情は明るく活気にみち、遠慮なく話し合う大きな声と無邪気な笑い声が響いていた。

有名なブランデンブルク門はこの通りを東側と西側に分けるちょうど真ん中に位置している。

ブランデンブルク門

昨年八月、ウサイン・ボルトの100mと200mの驚異的な世界記録で湧いた世界陸上ベルリン大会の最

終日、ここを舞台に、最後のレースである女子マラソンの熱戦が繰り広げられた。ブランデンブルク門の西側に出発点とゴールが設けられ、市内の観光名所をめぐるルートを3周するというコース設定である。

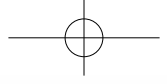
30年目のベルリン

京都情報大学院大学教授

茨木俊秀



「菩提樹の下」大通り



ベルリンの壁

第2次世界大戦の帰結として、ドイツは東と西に分断された。それまでドイツの首都であったベルリンは東ドイツのほぼ中央に位置するが、その重要性からやはり東と西に分けられた。東ベルリンは東ドイツの首都であり続け、西ベルリンはアメリカを中心とする連合軍の管轄下に置かれ、西ドイツの首都は、臨時の措置としてボンに移された。残された西ベルリンは、周りをぐるっと東ドイツに囲まれ、「赤い海に浮かぶ自由の島」といった状態だった。この自由の島へ向けて東から

脱出者が絶えなかったため、業を煮やした東ドイツは、一九六〇年代の初めから10年以上かけてベルリンの壁を構築した。最初は鉄条網の簡単なものであったが、次第に頑丈なコンクリート壁に作り替えられ、最終的に、高さ約4mの壁が延々と全長155kmにわたって作られたのである。

壁の崩壊

一九八〇年代の東ドイツはドイツ社会主義統一党ホーネッカー書記長の支配下にあった。しかし、一九八五年ゴルバチョフがソ連共産党の書記長に就任し、ペレストロイカ政策を推進する

と、東ヨーロッパ諸国でも民主化を求める声が高まり、東ドイツへも浸透していった。

そのターゲットがベルリンの壁の撤廃であり、西側への自由な移動である。一九八九年八月にハンガリーを通じてオーストリアへ脱出する「汎ヨーロッパピクニック」が成功すると、この動きはいよいよ抑えきれなくなり、十月には鉄の支配を誇ったホーネッカーも遂に解任された。その混乱の中で、十一月九日、「ゲートが開いた」という噂が広まると何万という東ベルリン市民が押しかけ、それを聞いて集まった西ベルリン市民が見守る中、警備隊は群衆に屈し、ゲートは解放された。

壁の今

今、記念碑的に残されているごく一部を除いて、壁は跡形もなく消えてしまっている。

十一月九日に民衆が押し掛けた検問所、チェックポイント・チャーリーには、現在、レプリカのみが残されてい

今に残された壁の一部。描いた絵を競うギャラリーになっている



